

副詞トクニ・コトニ・トリワケの分析

安部 朋世

千葉大学・教育学部

A Semantic Analysis of “*tokuni*,” “*kotoni*” and “*toriwake*”

ABE Tomoyo

Faculty of Education, Chiba University, Japan

本稿は、とりたて機能を有するとされる副詞のうち、「トクニ」「コトニ」「トリワケ」を取り上げ、それぞれが現れる文の特徴を考察し、とりたて機能の観点からそれらの意味を記述するものである。それぞれの副詞の特徴として、トクニには「特別に」と類似した意味に解釈される用法が存在すること、トリワケには、他の副詞的成分を程度性の面から修飾する用法が存在すること、コトニは、「[コトニ～だ]+否定」という関係で否定表現と共起する解釈が不自然になることが指摘できる。とりたての観点から3種の副詞に共通する意味を記述すると、「ある前提を満たす要素の集合の中で、当該要素がその前提を満たすものとして顕著であることを示す」ということになる。

キーワード：副詞 (adverb) トクニ (*tokuni*) コトニ (*kotoni*) トリワケ (*toriwake*)

1. はじめに

「トクニ」「コトニ」「トリワケ」は、次の(1)のように近似した意味を有する副詞である。

- (1) a そんな船に乗りこんで、大きな池の中に漕ぎ出したときは、若い女房たち、コトニ春の御殿をはじめて見た中宮方の女房たちは、まるで夢の国へでも迷いこんだようにうっとりした。(田辺聖子)*¹
- b そんな船に乗りこんで、大きな池の中に漕ぎ出したときは、若い女房たち、トクニ春の御殿をはじめて見た中宮方の女房たちは、まるで夢の国へでも迷いこんだようにうっとりした。
- c そんな船に乗りこんで、大きな池の中に漕ぎ出したときは、若い女房たち、トリワケ春の御殿をはじめて見た中宮方の女房たちは、まるで夢の国へでも迷いこんだようにうっとりした。

これらの副詞は、先行研究においてとりたての機能を有する副詞に分類されるが、個々の副詞が具体的にどのような特徴を有するのかについては、必ずしも明確ではない。

とりたての研究においては、ダケやサエといったとりたて助詞を中心に研究が進められてきたが、同様の働きを有するとされるとりたて副詞についても、個々の副詞がどのような特徴を有するのか、とりたての観点から研究を進める必要がある。本稿では、とりたて副詞に分類される「トクニ」「コトニ」「トリワケ」を取り上げ、それぞれの現象面における特徴を整理し、その意味をとりたての観点から記述することを目的とする。

2. 先行研究の問題点

とりたて副詞の研究は、副詞研究の中で副詞の下位分

類として「とりたて副詞」を主張する研究が主であり、個々の副詞についての詳細な研究は多いとはいえない。一方、個々の表現形式について、類似する意味を有する表現形式との比較から意味を記述する研究もみられるが、とりたての観点からの分析ではなく、前者の立場からの研究とどのような関わりを有するのかについては、必ずしも明らかではない。本稿で取り上げるトクニ・コトニ・トリワケについても、以下に述べるように同様の状況がみられる。

トクニ・コトニ・トリワケに関する前者の「副詞の下位分類として取り立て副詞を主張する」立場の研究として、小林(1987)、工藤(1977, 2000)*²等が挙げられる。

小林(1987)では、副詞の下位分類の一つとして「序列副詞」を提案し、それらの特徴として「順序付けをした上で、対比的に取りたてる副詞である」ことを挙げる(左p. 27)。そして、トクニ・コトニ・トリワケを、「わけても」「なかでも」「なかんずく」「おもに」「主として」とともに、「第一番目の位置へ評価付ける」ものと説明する(左p. 15)が、それぞれの副詞の違いなどについて、具体的な記述はない。

また、工藤(1977)では、トクニ・コトニ・トリワケを「範列語群の中から特別のものとしてとりたてる」働きを有する「特立」と説明する(p. 975)が、「特別のものとしてとりたてる」とはどのようなことか、また、それぞれの副詞はどのような特徴を有するのかについては、必ずしも明確な説明があるとはいえない。

一方、後者の「3種の副詞を比較しながらその違いを分析する」立場の先行研究としては、森田(1989)が挙げられる。そこでは、それぞれの副詞について次のように説明されている。(それぞれの副詞の説明の後に示す例文は、森田(1989)で挙げられる例文である。)

(2) トリワケ：(森田1989：820)

- a) 全体の中である部分が特に際立っており、他とは区別されるべき状態であること。

連絡先著者：安部朋世

- b) 「とりわけ」で示される状態は、“全体がいずれも平均以上のものであって、その中でも特に”と、ある種のものを取り分ける意識である。際立った状態ならプラス評価、マイナス評価、どちらの場合でも使える。
- (3) みな良い成績だが、トリワケ国語が良い。
(2)(b) のプラスイメージの例)
- (4) 低い成績の中でも、トリワケ数学が悪い。
(2)(b) のマイナスイメージの例)
- (5) コトニ：(森田1989：820)
- a) 数多くある事物の中から、それらとは違ったものを取り立てる意識から、さらに発展して「一段と」の意味になる。
- b) 際立った対象を話題として取り上げるだけで「とりわけ」のような、大部分が平均を超えている中で、さらにそのものを抜き出す意識はない。
- (6) コトニ、この辺りは地価が安いので、最近都会から大勢の人々が土地を求めてやってくる。
(5)(a) の例)
- (7) 旅館の数は別段少ないわけではございませんが、コトニ夏場は避暑客が大勢やってくるものですから、どこの旅館も満員なんです。
(5)(b) の例)
- (8) トクニ：(森田1989：821)
- a) 取り立てて言うくらい、他とは程度が著しく違っている状態を表す。「殊に」と用法は似ているが、「特に」は「特別(に)」と同じく意図的に他とは区別し、格差をつける場合に用いられる。
- b) 意志的判断を表しうるといえるのは、「特に」が話し手の主観的判断を表す語だからである。
- c) 「殊に／殊のほか」が対象自体の著しさに対する、かなり客観的な判断であるのに対し、「特に」は話し手の主観的な意見、判断で、話し手の責任において強調する表現である。そのため、「殊に」には見られない、否定の表現にも用いられる。
- (9) 本日に限りトクニ閲覧を許す。
(8)(a) の例)
- (10) この作品がトクニ気に入った。
(8)(b) の例)
- (11) トクニどころが悪いというわけではない。
(8)(c) の例)

森田(1989)によって、3種の副詞の違いについて明らかになった点も多いが、その記述は以下のように曖昧な点もみられる^{*3}。

まず、トリワケが“全体がいずれも平均以上のものであって、その中でも特に”と、ある種のものを取り分ける意識であるとする点についてであるが、「平均」という説明には問題がある。「平均」とは一般に複数の数値をならした値であり、客観的な視点から得られたものであると考えられるが、次の(12)(13)は、いずれも筆者の主観的な判断であり、「平均以上に“近年の倫理学書”に対する評価が低い」「平均以上に“未紀が思い出した記憶”に対して“聞き出すべき”という意見が少ない」わけではないと思われる。

- (12) 今日の間人は幸福について殆ど考えないようである。試みに近年現われた倫理学書、トリワケ我が国で書かれた倫理の本を開いて見たまえ。只の一個所も幸福の問題を取扱っていない書物を発見することは諸君に

とって甚だ容易であろう。かような書物を倫理の本と信じてよいのかどうか、その著者を倫理学者と認めるべきであるのかどうか、私にはわからない。(三木清)

(13) 未紀がバスルームにはいつているあいだ、ぼくは未紀がとりもどした記憶について、トリワケあのパパとこのことについて、どんなふうになぞねるべきかを考えていた。
(倉橋由美子)

また、「殊に／殊のほか」が対象自体の著しさに対する、かなり客観的な判断であるのに対し、「特に」は話し手の主観的な意見、判断で、話し手の責任において強調する表現である」という指摘についても、以下のような反例がみられる。

- (14) 民子の美しい手で持っていると銀杏の葉もコトニ綺麗に見える。
(伊藤左千夫)
- (15) 堤の上から見ると、砂原には幾つとなく穴ぼこを掘ってある。たいていの穴に骨が見え、トクニ、髑髏だけは実にはっきり見えた。
(井伏鱒二)
- (14)のコトニの例は、銀杏の葉が客観的に綺麗に見えるというのではなく、「民子の美しい手で持っている」ことによって「コトニ綺麗に見える」のであり、主観的な判断を伴う例であると考えられる。一方、(15)のトクニの例は、「骨の中ではっきり見えたもの」について述べたものと解釈できることから、(14)の例と比べて客観性の高い判断であると考えられる。

上記のように、いずれの立場からの先行研究の指摘でも、不十分な点がみられる。特に、先行研究では、3種の副詞の意味を「第一番目の位置へ評価付ける」「特別のものとしてとりたてる」「全体がいずれも平均以上のものであって、その中でも特に」と様々に説明されるが、どのような記述が最も妥当であるのか、考察する必要がある。よって、本稿では、先行研究の指摘を踏まえ、現象の観察から、それぞれの用法の特徴について考察し、3種の副詞の意味をとりたての観点から記述していく。

3. それぞれの副詞の特徴

3.1 トクニ・コトニ・トリワケが近似する意味を有する場合とトクニの「特別に」用法

次の例文は、トクニ・コトニ・トリワケのいずれに置き換えても、許容度に差は生じず、近似した意味を保つ。

(16) a 斎藤は叙用が斎宮寮頭になったため「斎藤」と略してよばれたわけである。その子孫が諸国に散った。なにしろ鎮守府將軍利仁の血系であるために国々では威をふるい、羽前、武蔵、加賀、能登、越中、越後、美濃など、トクニ北国、東国、坂東の在所、在所で栄えた。
(司馬遼太郎)

b ……羽前、武蔵、加賀、能登、越中、越後、美濃など、コトニ北国、東国、坂東の在所、在所で栄えた。

c ……羽前、武蔵、加賀、能登、越中、越後、美濃など、トリワケ北国、東国、坂東の在所、在所で栄えた。

- (17) a そんな船に乗りこんで、大きな池の中に漕ぎ出したときは、若い女房たち、トクニ春の御殿をはじめて見た中官方の女房たちは、まるで夢の国へでも迷いこんだようにうっとりした。

- b そんな船に乗りこんで、大きな池の中に漕ぎ出したときは、若い女房たち、コトニ春の御殿をはじめて見た中宮方の女房たちは、まるで夢の国へでも迷いこんだようにうっとりした。(田辺聖子)
- c そんな船に乗りこんで、大きな池の中に漕ぎ出したときは、若い女房たち、トリワケ春の御殿をはじめて見た中宮方の女房たちは、まるで夢の国へでも迷いこんだようにうっとりした。
- (18) a 私は、スポーツの世界、トクニプロスポーツの世界に、強く魅かれるようになっていたのだ。
- b 私は、スポーツの世界、コトニプロスポーツの世界に、強く魅かれるようになっていたのだ。
- c 私は、スポーツの世界、トリワケプロスポーツの世界に、強く魅かれるようになっていたのだ。

(沢木耕太郎)

許容度の差が生じない(16)から(18)をみると、いずれも、トクニ・コトニ・トリワケでとりたてられる要素が含まれるような〈ある集合〉が設定されていることに気付く。例えば、(16)は、「斎藤氏が“羽前、武蔵、加賀、能登、越中、越後、美濃など”で栄え、その中でも“北国、東国、坂東の在所、在所”で栄えたことが顕著であった」という意味であるが、とりたてられる要素である「北国、東国、坂東の在所、在所」と、その直前に示される「羽前、武蔵、加賀、能登、越中、越後、美濃など」は、〈集合内の要素〉と〈それを含む集合〉という関係にある。そして、「羽前、武蔵、加賀、能登、越中、越後、美濃など」という集合内の要素は全て「斎藤氏が栄えた」場所であるが、その中でも、とりたてられる要素である「北国、東国、坂東の在所、在所」での栄え方が〈顕著〉であった、というように、集合内の要素は、とりたてられる要素も含めて全て〈ある前提を満たす〉要素である、ということができる。同様に、(17)は、「春の御殿をはじめて見た中宮方の女房たち」が「若い女房たち」という集合内の要素として、(18)は、「プロスポーツの世界」が「スポーツの世界」という集合内の要素としてとりあげられていることが、それぞれ明示されており、集合内の要素ととりたてられる要素との関係も、〈ある前提を満たす〉という点で共通している。次の例は、(16)から(18)とは異なり、とりたてられる要素の直前にそれを含む集合が明示されているわけではないが、文脈上、集合が「孔子の政策の実行という仕事」であると読み取ることが可能であり、(16)から(18)と同様に集合が設定されているといえる。

- (19) a 孔子の政策の第一は中央集権即ち魯侯の権力強化である。この為には、現在魯侯よりも勢力を有つ季・叔・孟・三桓の力を削がねばならぬ。三氏の私城にして百雉（厚さ三丈、高さ一丈）を超えるものに郈・費・成の三地がある。先ずこれ等を毀つことに孔子は決め、その実行に直接当たったのが子路であった。自分の仕事の結果が直ぐにはっきりと現れて来る、しかも今までの経験には無かった程の大きい規模で現れて来ることは、子路のような人間にとって確かに愉快に違いなかった。コトニ、既成政治家の張り廻らした奸悪な組織や習慣を一つ一つ破碎して行くことは、子路に、今まで知らなかった一

種の生甲斐を感じさせる。(中島敦)

- b ……子路のような人間にとって確かに愉快に違いなかった。トクニ、既成政治家の張り廻らした奸悪な組織や習慣を一つ一つ破碎して行くことは、子路に、今まで知らなかった一種の生甲斐を感じさせる。
- c ……子路のような人間にとって確かに愉快に違いなかった。トリワケ、既成政治家の張り廻らした奸悪な組織や習慣を一つ一つ破碎して行くことは、子路に、今まで知らなかった一種の生甲斐を感じさせる。
- これに対し、次の例文は、いずれもトクニ（各例文の a）は自然であるが、トクニをコトニ（各例文の b）・トリワケ（各例文の c）にそれぞれ置き換えると、許容度が下がる。
- (20) a ……あくる日の日曜の朝、老案内人が私を呼びに来た。開場前の時刻に、外人兵の見物が来たのだった。(略) 私は何でも反抗せぬことにしていたので、開門前だが、トクニ案内する、と云い、入場料と案内料を請求した。(三島由紀夫)
- b ??…あくる日の日曜の朝、老案内人が私を呼びに来た。開場前の時刻に、外人兵の見物が来たのだった。(略) 私は何でも反抗せぬことにしていたので、開門前だが、コトニ案内する、と云い、入場料と案内料を請求した。
- c ??…あくる日の日曜の朝、老案内人が私を呼びに来た。開場前の時刻に、外人兵の見物が来たのだった。(略) 私は何でも反抗せぬことにしていたので、開門前だが、トリワケ案内する、と云い、入場料と案内料を請求した。
- (21) a もし、僕が黒人兵に食事を運ぶ仕事に飽きてしまっていたとしても、兎口を含めて、あらゆる子供たちの怨嗟にまで高まった羨望の熱い吐息を背いっばいにうけとめて歩くということの快樂だけで、僕はこの作業をやり続けただろう。しかし僕は、午後一度だけ兎口が地下倉へ入って来ることをトクニ父に頼んで許してもらったのだった。(大江健三郎)
- b ??もし、僕が黒人兵に食事を運ぶ仕事に飽きてしまっていたとしても、兎口を含めて、あらゆる子供たちの怨嗟にまで高まった羨望の熱い吐息を背いっばいにうけとめて歩くということの快樂だけで、僕はこの作業をやり続けただろう。しかし僕は、午後一度だけ兎口が地下倉へ入って来ることをコトニ父に頼んで許してもらったのだった。
- c ??もし、僕が黒人兵に食事を運ぶ仕事に飽きてしまっていたとしても、兎口を含めて、あらゆる子供たちの怨嗟にまで高まった羨望の熱い吐息を背いっばいにうけとめて歩くということの快樂だけで、僕はこの作業をやり続けただろう。しかし僕は、午後一度だけ兎口が地下倉へ入って来ることをトリワケ父に頼んで許してもらったのだった。
- (22) a 進水後十日目に、錨がとりつけられ、つづいてシートに包まれた蜂の巣甲鉄がクレーンで艦上に運び上げられた。この特殊な甲鉄は、第二号艦の弱点となる煙突の内部防禦のためにトクニ考案されたものであった。(吉村昭)
- b ??進水後十日目に、錨がとりつけられ、つづいて

シートに包まれた蜂の巣甲鉄がクレーンで艦上に運び上げられた。この特殊な甲鉄は、第二号艦の弱点となる煙突の内部防禦のためにコトニ考案されたものであった。

c ??進水後十日目に、錨がとりつけられ、つづいてシートに包まれた蜂の巣甲鉄がクレーンで艦上に運び上げられた。この特殊な甲鉄は、第二号艦の弱点となる煙突の内部防禦のためにトリワケ考案されたものであった。

(23) a 有馬義装員長の発案で、艦名にゆかりのある武蔵国の一の宮である埼玉県大宮市の氷川神社からトクニ招かれた神主の手によって、祭事がすすめられ、島本監督長、有馬義装員長、小川所長の玉串奉奠がおこなわれた。(吉村昭)

b ??有馬義装員長の発案で、艦名にゆかりのある武蔵国の一の宮である埼玉県大宮市の氷川神社からコトニ招かれた神主の手によって、祭事がすすめられ、島本監督長、有馬義装員長、小川所長の玉串奉奠がおこなわれた。

c ??有馬義装員長の発案で、艦名にゆかりのある武蔵国の一の宮である埼玉県大宮市の氷川神社からトリワケ招かれた神主の手によって、祭事がすすめられ、島本監督長、有馬義装員長、小川所長の玉串奉奠がおこなわれた。

トクニと比較してコトニ・トリワケの許容度が下がる(20から23)のトクニ文(各a)は、「特別に」と同様の意味に解釈されるが、これらは、とりたてられる要素とそれが含まれる集合との関係が、許容度の差が生じない(16)から(19)のような例文とは異なる。例えば、(20)は、「“外国兵”のみを特別に案内するのであって、それ以外は案内しない」という含みが感じられる文であり、「案内し得る対象」として設定された集合の中で、とりたてられる要素のみ「案内する」のであって、それ以外は「案内しない」と否定される関係にある。同様に、(21)は、「午後一度だけ兎口が地下倉へ入って来ること」を特別に父に頼んで許してもらったのであって、それ以外は頼まなかった」という意味に、(22)は、「第二号艦の弱点となる煙突の内部防禦のために特別に“この特殊な甲鉄”が考案されたものであって、それ以外に防禦のために考案されたものはない」という意味に、そして、(23)は、「“神主”は艦名にゆかりのある武蔵国の一の宮である埼玉県大宮市の氷川神社から特別に招かれたのであって、それ以外にそのように招かれた神主はいない」という意味に感じられ、とりたてられる要素を含む集合が、(20)から(23)と同様の関係で設定されてはいない。

とりたてられる要素を「当該要素」、設定される集合を「前提集合」、前提集合に含まれる当該要素以外の要素を「他の要素」と呼ぶことにすると、3.1で考察した、トクニ・コトニ・トリワケが近似する意味を有する用法と、「特別に」と類似する意味を有するトクニの用法は、それぞれ次のようにまとめられる。

(24) a トクニ・コトニ・トリワケが類似した意味を有する場合
=ある前提を満たす要素の集合の中で、当該要素がその前提を満たすものとして顕著であることを示

す。

b トクニに対してコトニ・トリワケの許容度が下がる場合のトクニ(「特別に」用法)
=ある前提をみだし得る要素の集合の中で、当該要素のみがその前提を満たし、それ以外は満たさないことを示す。

3.2 トクニ・コトニ・トリワケと修飾用法

トリワケには、他の副詞的表現に前接して、〈それらの程度が甚だしい〉という意味に解釈される例がみられる。例えば、(25)は、「衝撃をむさぼるように受け止める」際の「“むさぼるように”の程度が“甚だしく”という解釈に、(27)は、「重々しく繰り返す」際の「“重々しく”の程度が“甚だしく”という解釈に、(29)は、「冷たく言った」際の「“冷たく”の程度が“甚だしく”という解釈に、それぞれ感じられる。これらの用例は、トリワケをトクニやコトニに置き換えると相対的に許容度が下がるように感じられる(26(28(30)))。

(25) なるほど一昨日からの習志野の教練は、体力のない周二にとって一面では苦難の連続であった。(略)とはいえ、それは単に中学三年生の野外教練にすぎず、三日間の学課から解放された時間、強制された一種の遊びの期間ともいえた。なかんずく、このたびは特殊な愉悦が与えられていた。ただの五発ではあったけれど、はじめて空砲の射撃を許されたからである。空砲とはいえ、そのとき、周二は肩にくる思いがけぬ衝撃を、トリワケむさぼるように受けとめた。(北杜夫)

(26) a ??…なかんずく、このたびは特殊な愉悦が与えられていた。ただの五発ではあったけれど、はじめて空砲の射撃を許されたからである。空砲とはいえ、そのとき、周二は肩にくる思いがけぬ衝撃を、トクニむさぼるように受けとめた。

b ?…なかんずく、このたびは特殊な愉悦が与えられていた。ただの五発ではあったけれど、はじめて空砲の射撃を許されたからである。空砲とはいえ、そのとき、周二は肩にくる思いがけぬ衝撃を、コトニむさぼるように受けとめた。

(27) ぼくの病気は……脊髓性進行性筋萎縮症、というんです」「え、脊髓性……筋萎縮?」と、千代子も思わず問い返した。「脊髓性進行性筋萎縮症」と、臨床講義をする教授でもあるかのように、米国はトリワケ重々しく繰り返した。(北杜夫)

(28) a ?ぼくの病気は……脊髓性進行性筋萎縮症、というんです」「え、脊髓性……筋萎縮?」と、千代子も思わず問い返した。「脊髓性進行性筋萎縮症」と、臨床講義をする教授でもあるかのように、米国はトクニ重々しく繰り返した。

b ?ぼくの病気は……脊髓性進行性筋萎縮症、というんです」「え、脊髓性……筋萎縮?」と、千代子も思わず問い返した。「脊髓性進行性筋萎縮症」と、臨床講義をする教授でもあるかのように、米国はコトニ重々しく繰り返した。

(29) だが、ボクサーにとって試合の延期がどれほど辛いものかを考えれば、内藤はもっとはっきり私を責めることもできたはずだった。私には、責めないでいてく

れる内藤の優しさがありがたかった。しかし、私はト
リワケ冷たく内藤に言った。「とにかくエディさんに
あやまるんだ。理由を説明するだけでいい。そうすれ
ば納得してくれる」 (沢木耕太郎)

(30) a ??だが、ボクサーにとって試合の延期がどれほど辛
いものかを考えれば、内藤はもっとはっきり私を責
めることもできたはずだった。私には、責めないで
いてくれる内藤の優しさがありがたかった。しかし、
私はトクニ冷たく内藤に言った。「とにかくエディ
さんにあやまるんだ。理由を説明するだけでいい。
そうすれば納得してくれる」

b ?だが、ボクサーにとって試合の延期がどれほど辛
いものかを考えれば、内藤はもっとはっきり私を責
めることもできたはずだった。私には、責めないで
いてくれる内藤の優しさがありがたかった。しかし、
私はコトニ冷たく内藤に言った。「とにかくエディ
さんにあやまるんだ。理由を説明するだけでいい。
そうすれば納得してくれる」

(25)(27)(29)のようなトリワケは、次のような程度副詞の用
法と同様の用法であると考えられる。

(31) ゆうべひどく熱心^{トクニ}にあなたを推せんされましてね。

(仁田2002: 155(45))

(32) 城壁がずいぶんこなごな^{コトニ}に崩れた。

(仁田2002: 155)

以上のことから、トリワケには、文中の他の副詞的表
現を程度性の面から修飾する用法があるということがで
きる。

3.3 トクニ・コトニ・トリワケと否定表現

森田(1989)では、トクニとコトニの違いとして、否
定表現に用いられるか否かを挙げている。この特徴は、
次のように、トリワケにもみられる特徴である。

(33) a 私はトクニボクシングのよいファンというのでは
なかったかもしれない。試合を見るため会場に足を
運ぶ、というほどの熱心さはなかった。テレビで充
分だった。そのテレビ中継すら、すべてを見ていた
というわけではない。見たり見なかったり、という
程度だった。

b ??私はコトニボクシングのよいファンというのでは
なかったかもしれない。試合を見るため会場に足を
運ぶ、というほどの熱心さはなかった。テレビで充
分だった。そのテレビ中継すら、すべてを見ていた
というわけではない。見たり見なかったり、という
程度だった。

c 私はトリワケボクシングのよいファンというのでは
なかったかもしれない。試合を見るため会場に足を
運ぶ、というほどの熱心さはなかった。テレビで
充分だった。そのテレビ中継すら、すべてを見ていた
というわけではない。見たり見なかったり、とい
う程度だった。 (沢木耕太郎)

(34) a 協栄ジムは、他のジムと比べてトクニ立派といえ
る造りではなかったが、いつ行っても明かるく活気
があった。

b ??協栄ジムは、他のジムと比べてコトニ立派といえ
る造りではなかったが、いつ行っても明かるく活気

があった。

c 協栄ジムは、他のジムと比べてトリワケ立派とい
える造りではなかったが、いつ行っても明かるく活
気があった。 (沢木耕太郎)

(35) a 卯の花っておからのことだわ。おからってトクニ
おいしいものじゃないけれど、それでもやっぱり結
構おいしいわ。兄さんたちはどうしてあんなにまず
そうな顔をしたのかしら。

b ??卯の花っておからのことだわ。おからってコトニ
おいしいものじゃないけれど、それでもやっぱり結
構おいしいわ。兄さんたちはどうしてあんなにまず
そうな顔をしたのかしら。

c 卯の花っておからのことだわ。おからってトリワ
ケおいしいものじゃないけれど、それでもやっぱり
結構おいしいわ。兄さんたちはどうしてあんなにま
ずそうな顔をしたのかしら。 (北杜夫)

(36) a 彼は女の子、他人が可愛いと讃める藍子にはトク
ニ期待を抱かなかった。肝腎なのは男の子である。
それなのに、峻一にしろ周二にしろ学業が人にすぐ
れるどころか、むしろ劣等に近いということは、甚
だ理性的でない憤りを徹吉に与えた。

b ??彼は女の子、他人が可愛いと讃める藍子にはコト
ニ期待を抱かなかった。肝腎なのは男の子である。
それなのに、峻一にしろ周二にしろ学業が人にすぐ
れるどころか、むしろ劣等に近いということは、甚
だ理性的でない憤りを徹吉に与えた。

c 彼は女の子、他人が可愛いと讃める藍子にはトリ
ワケ期待を抱かなかった。肝腎なのは男の子である。
それなのに、峻一にしろ周二にしろ学業が人にすぐ
れるどころか、むしろ劣等に近いということは、甚
だ理性的でない憤りを徹吉に与えた。 (北杜夫)

コトニが否定表現と共起しても不自然にならない場合
は、次のように、否定表現との関係が異なる。

(37) a 学校もあまり出来がよくなく、トクニ算術ができ
ず、勉強をする気も起きなかった。

b 学校もあまり出来がよくなく、コトニ算術ができ
ず、勉強をする気も起きなかった。 (北杜夫)

c 学校もあまり出来がよくなく、トリワケ算術がで
きず、勉強をする気も起きなかった。

(37)は「算術ができず」と否定表現と共起する例である
が、これは、「算数ができる」ことが「顕著」というこ
とではない」という意味ではなく、「学校の勉強がおし
なべてできないが、その中でも“算術ができない”こと
が“顕著”である」という意味である。

以上のことから、「[トクニ・トリワケ～だ]+否定」
という表現では不自然にならないが、「[コトニ～だ]+
否定」という表現では不自然になることが確認される。

3.4 3節のまとめ

以上、それぞれの副詞について、その特徴を分析した
結果をまとめると、以下のようになる。

(38) トクニには、「特別に」と類似した意味に解釈され
る「特別に」用法が存在する。

(39) トリワケには、他の副詞的成分を程度性の面から修
飾する用法が存在する。

(40) コトニは、「[コトニ～だ]+否定」という関係で否定表現と共起する解釈が不自然になる。

また、とりたての観点からそれぞれの用法を記述すると、以下のようにまとめられる。

(41) トクニ・コトニ・トリワケが類似した意味に解釈される場合

=ある前提を満たす要素の集合の中で、当該要素がその前提を満たすものとして顕著であることを示す。

(42) トクニの「特別に」用法

=ある前提をみたし得る要素の集合の中で、当該要素のみがその前提を満たし、それ以外は満たさないことを示す。

小林(1987)では、トクニ・コトニ・トリワケを「第一番目の位置へ評価付ける」(左p.15)としていたが、これまでの考察から明らかなように、これら3種の副詞は、前提集合内の要素の全ての要素を序列付けてスケール上に置くわけではない。よって、「第一番目の位置へ評価付ける」という記述は妥当ではないということになる。また、工藤(1977)の「範列語群の中から特別のものとしてとりたてる」(p.975)という記述も、トクニの「特別に」用法との違いが明確ではないことから、曖昧さが残る記述であるといえる。さらに、森田(1989)の「平均以上のものであって、その中でも特に」(p.820)という記述も、2.節で指摘したような問題点があった。〈前提集合〉の設定と〈当該要素〉〈他の要素〉との関係という観点から記述する本稿の記述は、それら先行研究の問題点を解決し、それぞれの意味をより明確に記述したのものとして位置づけられるものである。

4. おわりに

以上、本稿では、トクニ・コトニ・トリワケについて、それぞれの特徴を明らかにし、その意味をとりたての観点から記述した。本稿で指摘した特徴ととりたて性との関係、例えば、否定表現との共起関係が、とりたて性とのように関わるのかや、コトニとトリワケのそれぞれの特徴がとりたての観点からどのように説明されるのかについて、また、とりたて助詞との関係など、今回明らかにできなかった問題については、今後の課題となる。

【注】

*1 以下、引用の例文については、トクニ・コトニ・トリワケを片仮名表記にし、下線や傍点などを適宜削除または付け加えている。

*2 工藤(1977)では、「ただ・おもに・せいぜい」などの副詞を「限定副詞」に分類し、「文中の特定の対象を、同じ範列に属する他の語とどのような関係にあるかを示しつつ、範列語群の中からとりたてる機能をもつ副詞」(pp.971-972)と定義する。この「限定副詞」は工藤(1982)で「とりたて副詞」と改称されており、工藤(2000)でも「とりたて副詞」の名称を用いていることから、本稿でも「とりたて副詞」の名称を用いることにする。

*3 下記に具体的に指摘する点以外にも、次に述べる

ような疑問点が存在する。コトニについて、「際立った対象を話題として取り上げるだけで「とりわけ」のような、大部分が平均を超えている中で、さらにそのものを抜き出す意識はない。」として、

(7) 旅館の数は別段少ないわけではございませんが、コトニ夏場は避暑客が大勢やってくるものですから、どこの旅館も満員なんです。

の例を挙げる(森田1989:820)が、(7)のコトニをトリワケに置き換えても、さほど許容度に差が生ずるとは感じられないように思われる。コトニとトリワケの意味的な違いについては今後の課題となるが、それぞれがどのような特徴を有するのかについては、3節で考察する。

【用例出典】

用例はすべて『CD-ROM版新潮文庫の百冊』(新潮社)から採集したものである。以下に作品名・著者名を挙げる。伊藤左千夫『野菊の墓』、井伏鱒二『黒い雨』、大江健三郎『飼育』、北杜夫『楡家の人びと』、倉橋由美子『聖少女』、沢木耕太郎『一瞬の夏』、司馬遼太郎『国盗り物語』、田辺聖子『新源氏物語』、中島敦『弟子』、三木清『人生論ノート』、三島由紀夫『金閣寺』、吉村昭『戦艦武蔵』

【参考文献】

- 工藤浩(1977)「限定副詞の機能」『国語学と国語史』明治書院, pp.969-986
 工藤浩(1982)「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」『国立国語研究所報告71 研究報告集3』, pp.45-92
 工藤浩(1983)「程度副詞をめぐる」『副用語の研究』渡辺実編, 明治書院, pp.176-198
 工藤浩(2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店, pp.163-234
 小林典子(1987)「序列副詞—「最初に」「特に」「おもに」を中心に—」『国語学』151集, 左pp.15-29
 小林典子(1992)「副詞による取り立ての焦点を探る」『文藝言語研究・言語篇』22, 筑波大学文芸・言語学系, pp.55-69
 仁田義雄(2002)『副詞の表現の諸相』くろしお出版
 沼田善子(1986)「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社, pp.105-225
 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
 矢澤真人(1991)「序列と連用修飾—コトの中のモーダルな修飾成分の取り扱い—」『国語国文論集』第20号, 学習院女子短期大学国語国文学会, pp.30-42

【付 記】

本稿は、平成17年度科学研究費補助金・若手研究(B)「日本語における「とりたて」の体系化に関する記述的研究」による研究成果の一部である。